

## ピラミッド・テキスト：翻訳と注解（5）

塚 本 明 廣

### The Pyramid Texts: A Japanese translation with commentary (5)

Akihiro TSUKAMOTO

#### 第223章

(Pyr214)

a	wH j.nn jhj jhj	目覚めよ、見廻せ 叫べ、叫べ
b	h; (.)   cHc Hmsj jr x; m t x; m Hnq.t	おお 王よ 立て、座れ 一千のパンと一千のビールと、
c	;Sr.wt Sbtj.w.k m nm.t t_jtH m wsx.t	屠殺場の肋骨(共の汝)の炙肉(共)と 大広間のイテフ・パンとに向かい

本節後半で言及された供物は、ごく初期の貴人墓における出現以来、ファラオ時代のエジプト史を一貫して使われ続けた供物リストの言わば定番メニューである。リチュタイム(M. Lichtheim)がその『エジプト文学史』三巻において跡付けたことの一つに、生前の地位・肩書きと供物リストおよび肖像からなる個人墓の簡素な墓碑銘から、やがて自伝が発達して散文文学を生み、祈願文が発展して韻文文学として第5王朝時代に開花した、という主張がある<sup>1</sup>。その定番とも言える供物リストを含むことは、PTもまたそのエジプト文学史の濫觴と無縁ではあり得ないという、明白な証拠と言えよう。

a jhj jhj を FE は“So shout I”と訳すが、以下の言及箇所末尾では、“Shout!. Shout !”と訳している<sup>2</sup>。

1491a jnn (P) | jnn (P) | jhj jhj

1491a の綴り<jhj>に対し、214a の綴りが<jhjh>であることを考慮したようには見えない。FD には、jhj, “Oho!”, Pyr. 654 (p. 28) の他、hy, 間投詞“Hail!”, 名詞“shout” (p. 157)、hyhy, “make acclamation” (p. 158) の記載があるものの、動詞 jhj への言及がない。ただ、これら一連の関連語彙は、ここでの語義の推測材料となる。A (736) は語根 jhj, “Cry”を掲げながらも (p. 553)、sDm=n.f 形しか例証されないとして、ここへの言及がない。

b Hmsj = コード表記<N41Q01>は、Pyr57c, 129b に既出。FE は|命令|の意に訳し、文脈上も問題はない。ただし、コード<Q01>を含む綴りが表記した形式の特定は問題となる。命令形・単数即ち、Hmsj とする A (798) に従えば、<N41Q01>は表音文字<M41>[Hm]を伴う表語文字<Q01>|Hmsj|による表記となる。

既出の57cにおける Hmsj.T, wpj.T; 57a,b: Dj.T の何れも能動 sDm.f 形<sup>3</sup>であるという文法上の並行関係も、これを支持する。しかし同じ綴り<N41Q01>を含んでも、W129b では名詞化した関係節形式 Hms.t と読まれた<sup>4</sup>。次に掲げるとおり、W に対する TMN の並行本文における表音文字による異表記から、それは明白である(弱子音語根 j は、一般的に表記されない)：

W0129b:<N41tQ01Tn>

T0129b:<N41stTn>

M0129b:<N41stA031Tn>

N0129b:<N41 [s] tA031Tn>

上の W の場合、<Q01>自体は表語文字 {Hmsj} として機能し、これに表音文字 t が仮名として振られたと見るべきであろう。一方、<Q01>には表音文字 [st] としての用例が少なくない。例えば以下の語例では、<Q01>を [st] と転写しない限り語形の特定ができない(各行末は翻字)：

Sws.t	(女神名)	W0123a Sw[st]t
Tms.t	「緋色」	M1147a Tm[st]t`n333他、4例
nms.wt	「水差し」	F1902b n[nm][st]`n42`n42`n42他、12例
st.t	(語義不明)	P2209b [st]tt
st=n.f	「耕す」	N1781d [st]tnf
stj	「代理」	M0752b [st][tj]j 他、10例
stj=jn.sn	「投げ出す」	M1197d s[st]tijnsn 他、3例
t;_stj	「ヌビア」	N0864d {t;}[st]ti`n17

したがって、<Q01>を表音文字 [st] として表記<N41tQ01Tn>を翻字 [Hm]t[st].Tn=転写 Hms.t.Tn と読んだ可能性も排除できない。その可能性は、N2091c の表記<N41Q01tA031>=翻字 [Hm][st]t=転写 Hms.t にもある<sup>5</sup>。しかしこの2例は、<Q01>を表語文字 {Hmsj} としても、表音文字により t が補われているため、読み誤ることはない。同時に、その他の用例において [Hm][st] と読むことは即ち状態形 Hms.tj を意味し、A(591-2)が述べる如く、命令形の動的 {命令} に対する状態形の静的 {勸奨法} を対比する用法を読み取ることになる(ただし、A にはここへの言及がない)。その可能性を検討するために、他の語と対になった表記<N41Q01>の出現箇所を検索してみると、特に次の組合せが頻出する。

A. cHc 「立つ」との対<sup>6</sup>

W/N0214b h; (.) | cHc Hms jr x; m t x; m Hnq. t

W/N0473b cHc (.) | j=n Hrw Hms (.) | j=n stX

A1067b cHc Hms wx; n.k t; jr. k

P1067a h; (.) | cHc Hms wx; n. k t; jr. k

P1068b h; (.) | cHc Hms wx; n. k t; jr. k

M/N1702a (.) | cHc n jt. k wr Hms n mw. t. k nw. t

P1552c cHc. k Hms. k m jnpw// xntj t;\_Dsr

A/F1901b cHc n. k wr. w Hms n. k wrS. w Hrw js nD jt. f

N2094b Htm (.) | pn m nTr cHc Hms psD. tj

P/N1298a h; (.) | pw cHc Hms. k Hr xndw wsjr

0214b おお王よ、一千のパンと一千のビールに向かい立ち、座れ

0473b 立てウナス王よ、とホルス(神)は言う。座れウナス王よ、とホルスは言う。

1067ab/1068b おおペピ王よ、立て、座れ、御身の上の土を払え

- 1702a 王よ汝の父偉大者のために立て、汝の母ヌートのために座れ  
 1552c 汝、聖地を司るアヌビスのごとく立ち給え、(そして)座り給え  
 1901b 偉大なる者達は汝のために立ち、守護者達は父の保護者ホルスたる汝のために座る  
 2094b これなる王は神として飾られ、二つの九柱神は立ち、(そして)座る  
 1298a おおペピ王よ立て、汝オシリスの玉座に座り給え

最後の1例以外は全て特定の文法形式、即ち前半6例が命令形<sup>7</sup>で、後半4例が sDm.f 能動形<sup>8</sup>で統一された対句である。A(365)によれば、この場合の sDm.f 形は {願望・命令・意志}を表す接続法である。最後の例については、FE は共に命令に訳しているものの、形式上は、前半が cHc の命令形<sup>9</sup>、後半が Hms.k の sDm.f 能動形<sup>10</sup>で、異なる文法形式が混在した定型句である。

B. Tzj 「起こす」との組合せ

P1357a Tz Tw ;x n (P) | pn Hms wSb. k

N1735a Tz Tw Hms Hr xndw. k pw bj;=j

M/N1680a Tz Tw jt wr Hms. k xntj.sn

N2012a Tz Tw (N) | pw Hms. k Hr xndw. k bj;

1357a 身を起こせ、これなるペピ王の魂よ、座れ、汝食べ給え

1735a 身を起こせ、汝のこれなる鉄の玉座に座れ

1680a 身を起こせ、偉大なる父よ、汝彼らの前に座し給え

2012a 王よ身を起こせ、汝、汝の鉄の玉座に座し給え

Tz は上の4例全てが命令形<sup>11</sup>である(Tz Tw 「身を起こせ」)。Hmsj の場合、最初の1357a の例では、FE は Tz、Hms、wSb の何れも命令の意に訳すが、文法形式上は Tz と Hms とが命令形<sup>12</sup>であるのに対し、wSb.k は sDm.f 能動形<sup>13</sup>である。wSb 「身を養う」(A,p. 555)は FD(p. 70)に未記載(動詞は「答える」のみ)だが、FE では“eat”と命令に訳す。因みに、FE が命令に訳している1996b の復元箇所においても、SPT が人称語尾付きの Hms.k と復元したものを A(798)は命令形に分類している。2番目の1735a の例は両方共に命令形である。最後の2例の Hms.k は、sDm.f 能動形<sup>14</sup>である。FE は、それぞれ that you may sit、may you sit と訳し、接続法としてのニュアンスを出している。

以上 A、B の例では、命令形とその他の形式との組合せが見られる。A(591-2)の言及箇所を考慮すると、表記<N41Q01>を翻字[Hm][st]=転写 Hms.tj<sup>15</sup>すなわち {命令}の機能を持つ状態形=擬似分詞とする可能性を一概に否定はできない。A の前半6例、B の前半2例において可能である。しかし、全ての用例において一律に Hms.tj と転写できないのも事実である。A、B 共に、人称接尾辞を持つ形式がその例である。それらは、A(796)によるとすべて sDm.f 能動形である。ただし A(256)が、E(475-76, 1003)に従って、sDm.f 能動形に {命令} ないし {勧奨} のニュアンスを伴う用法を認めた決定的根拠は、並行本文における変異としての命令形と sDm.f 能動形との並存にあった。そこでは、外的手掛りを欠くとして他の箇所は全く言及されていない。しかし上で検討したとおり、同一行内に定型表現として現れ、その際命令形と対をなす用例も、sDm.f 形の {命令} または類義の用法を支持する証拠と言えよう。

これまでの問題を語 Hmsj の表記という観点から整理し直す。Hmsj の全派生形式中 A031/A032を含む形式は全113例あり<sup>16</sup>、その中でこれらの削除により語形が確定できなくなる例は皆無である。言い換えれば、これら2文字は限定符として使用されている。これに対し、Q01を含む形式18例全てが、この文字の削除により語形が特定できなくなる。即ち、Q01は少なくとも限定符ではない。問題は、表語文字か表音文字かという点に絞られる。これは、Q01の音価が {Hmsj} か [st] かという問題に言い換えることができる。sDm.f 型の人称接尾辞を伴う形式では、tj という状態形人称接尾と重複することになるため、Q01が活用

語尾の一部を表記しない限り、表音文字であり得ない。即ち表語文字の用法である。活用語尾の一部とは、sDm=t.f 形(Hms=t.f)、関係節形(Hms.t.f)、受身語尾(Hms.tj.f)の場合である。実際、確実な例として、N2091 c に sDm=t.f 形、W129b に関係節形がある。ただし、上述の如く後者は表語文字とすることが可能であり、前者も表記<N41. Q01tA031>を表音文字として[Hm][st]=t`a031とも、表語文字として[Hm]{Hms}=t`a031とも翻字できるため、結果的には同じ転写形 Hms=t となる。結局、文法的に語形が確定できる用例において、Q01の文字機能を決定することはできない。消極的な言い方とならざるを得ないが、少なくとも語 Hmsj の派生形式に限って言えば、Q01を表語文字とすることに不都合はない。恐らく、上述の表音文字[st]としての用例が椅子との意味的関連が皆無に等しいのに対し、Hmsj「座る」と椅子 Q01との意味的連想関係が、表語文字としての機能を強化していると思われる。ただし、同じく椅子を表記しながら、Q02(とその異形)を含む形式14例においては、Q02は限定符として機能している。このことを考慮すると、「少なくとも Hmsj に関しては、Q01は表語文字、Q02は限定符として使い分けた」と結論して良いと思われる。Q02について言えば、表語文字としては294a に [xndw]「玉座」と読む例が PT 全体で僅か2例(W,T)見えるだけで、40例以上の xndw の用例も含め、その他の126例全てにおいて限定符の用法である。

c nm.t「屠殺場」の読みと意味とは、ゼーテ(SUK,S.156)の考察に従う。

## (Pyr215)

a Htm nTr m Htp_nTr	神は神の供物を供えられる
Htm (.)  m t.f pn	これなる王は彼のパンを供えられる
b jj.t n b;. k wsjr	汝の霊の許に来よ オシリスよ
b; jm ;x.w	魂共の中の霊よ
sxm jm s.wt.f	その諸々の座の中で力溢れる者よ
c nDw psD.t m Hw.t_sr	東宮で九神が守る者よ

a Htm は、sDm.f 受動形である。

b b;以下は、オシリスの言い換えである。複数形の座は、複数の霊や神々を意味するのであろうか。

c nDw はオシリスを先行詞とする関係節形で、語根は nD、語尾 -w は先行詞オシリスの性(男性)を標示するのみで、数は標示しない。関係節内の主語は女性名詞 psD.t である。Hw.t\_sr「東宮」(FE の解釈に従う訳)、字義どおりには「長官の宮」は、14c に既出。PT の例証箇所全6例中、ここ以外の5例においては(14c, 622b, 957c, 1451b, 1614b)jmj.t(または m) jwnw「オンにある」という語句を伴う。

## (Pyr216)

a h; (.)	おお 王よ
sjc kw n.j	我が許に御身を高めよ
jmz kw jr.j	我が方に御身を近づけよ
b m Hrj r.j	我から遠ざかるなかれ
jz jmDr.k jr.j	墓は我に対する汝の妨げ
c Dj=n.j n. k jr.t_Hrw	我は汝にホルスの眼を与えた
jp=n.j n.k sj	我は汝にそれを別った
h; nxx n.k xr.k	おお 汝に属すよう汝の許に

a sjc は、jc の使役語幹(E, 428bb; A, 803)、jmz は mz の語頭音添加形(A, 759)である。A (Table26)によれば命令形に語頭音添加を持つのは末尾音が弱子音の語根と 2 子音語根の動詞のみである。

kw は、他動詞の目的語として機能する人称代名詞 Tw に対する異形であり、これが PT を特徴付ける古い言語形式または方言形であることは、27c への注解に既出。

(Pyr217)

a h; (.)	おお 王よ
cHc Szp n. k t.k pn m c.j	さあ 我が手からこの汝のパンを汝に受取れ
b Dd_mdw zp 4	呪文 4 回
h; (.)	おお 王よ
wnn.j n.k jmj_s.t_c	我汝に助け手とならん

(Pyr218)

a Dd_mdw zp 4	呪文 4 回
wdn n.f	彼に供えよ
m scH.f nb	全ての彼の威信に掛け
m s.t.f nb.t	全ての彼の座に掛け

## 第224章

b Htp_Dj_gb	ゲブの賜物を
m scH.k nb	全ての汝の威信に掛け
m s.t.k nb.t	全ての汝の座に掛け
c wH kw (.)	身を奮立たせよ王よ
jnn kw (.)	身を巡らせよ王よ
d Sm n.k wD.k mdw n j;.wt Hrw	自ら発て 汝ホルスの丘に命令し給え
e Sm n.k wD.k mdw n j;.wt stX	自ら発て 汝セトの丘に命令し給え
f Sm n.k wD.k mdw n j;.wt wsjr	自ら発て 汝オシリスの丘に命令し給え

b FE によれば、この一節は本来 f に後続する。つまり c–f からなる本文を a、b で包む構造になる。

d j;.wt Hrw 「ホルスの丘」は、ここと同じ複数形で PT に18回出現し、その全用例で j;.wt stX 「セト(=ホルスと争った神)の丘」と対をなす。その用例のほぼ半数で、j;.wt Hrw=j.t 即ち名詞 Hrw 派生の形容詞 Hrwj.t 「ホルスの」が複数名詞の j;.wt 「丘共」を修飾する構文である。他に、単数形で1回だけ現れる(1295b: j;.t Hrw)。j;.wt wsjr 「オシリス(=ホルスの父)の丘」は、ここ以外には222c に例証されるだけである。

「ホルスの丘(共)」とは何か。その他の語句との連結も含めて、PT 中の用例の大部分が復活を促す呼び掛けの中に現れる。呼び掛ける主体は様々であるが、呼び掛けられるのはほとんど常に王である。以下に PT 中の全ての言及箇所を掲げる：

0135c ホルスの丘共は汝に仕え、セトの丘共は汝に仕えるという対句

この語句と、身体各部をアトムに関連付けた直前の文脈との意味的関連性は、一目瞭然とはいえないものの、それに対する FE の注すなわち「神の支配域とは古人々が定着した丘を指す」という指摘が、その他の箇所も含めた説明の鍵と思われる。

0218d-f 復活して再び支配するよう呼び掛ける場面

0222b, c (同上)

- 0480b 神々が、昇天し天地を支配するよう促す場面
- 0487a, b 丘や原に立つホルス、セト、イアルに対する挨拶
- 0574b 復活の呼び掛けの中で
- 0598b 黄泉の川の渡し守に対する呼び掛け、丘々でラーを崇めるカーの所有者達に言及
- 0770b 丘に座し、丘を巡視し、オン(聖地)の九神の頭として玉座に座して裁けとの王への呼び掛け
- 0915b 天に上りラアに会うと王が宣言、白冠が応じて、高き丘共とセトの丘共に言及
- 0916a 同じ文脈で、鷹に化身した王が高き丘共からセトの丘共へ翔ける
- 0943b 昇天した王に対してゲブが葦原と丘共が王の所有物たることを宣言する
- 0948c 丘々に住む神々に代わりラアに付き従うとの王の宣言
- 0961b 天地と原と丘々とは、諸々の町と県とは王に与えられたと宣言
- 0994a 丘々と原が王を崇めると宣言
- 1295b 明けの星として下り、南北のホルスの丘を巡視するよう呼び掛け
- 1364a 王は復活し、神々に招じ入れられ、南北の丘々を巡視し、最後に明けの星として昇天する
- 1475c 王のため、アトムは諸々の県を召集し、ゲブは諸々の都市を与える。丘々と原さえ。
- 1735c 父たる故王に対し、復活し丘々を巡回するようにとの呼び掛け
- 1904b, c 立ち上り、丘々を見るように呼び掛け
- 1928b, c 復活し、ミンとして丘々を巡るよう呼び掛け
- 2011b 復活し、南北の丘々を巡るようにと呼び掛け、ネケン(地名)のホルスへの言及がある
- 2099a 神々の導きにより丘々を巡る情景の描写
- 2233b, c 父たる故王が丘々を巡られるように守護しようとの誓い

以上、丘(単数形 j;.t、複数形 j;.wt)への全言及箇所において、FE の指摘する「支配領域、領地」の意義を読み取ることができる。

(Pyr219)

- |                      |              |
|----------------------|--------------|
| a Htp_Dj_nsw. t      | 王の賜物を        |
| m scH. w. k nb. w    | 全ての汝の威信に掛け、  |
| b Hbs. k b;          | 汝の衣は 豹皮      |
| Hbs. k xsdD.         | 汝の衣は キルト     |
| c Sm. k m x;w. tj. k | 汝汝のサンダルで進み給え |
| rxs. k k;            | 汝牡牛を屠殺し給え    |

c Sm.k,rxs.k は、何れも能動 sDm.f 形と見られる。FE は、{勸奨}の意を含ませた訳をしているが、勸奨の意の自立的用法を説明する A の当該箇所(255-6)には言及がない。既に検討済みの Pyr214b の語注において述べたとおりである。

(Pyr220)

- |                        |                  |
|------------------------|------------------|
| a Sm. k m wcD_cn       | 汝ワアジュ・アン船で行け     |
| m scH. w. k nb. w      | 全ての汝の威信に掛け       |
| m s. wt. k nb. t       | 全ての汝の王座に掛け       |
| b nHb. t. k xnt cnx. w | 汝の蓮の蕾の錫は 生者達の先頭に |

mdw. k xnt ;x. w	汝の言葉は 霊共の先頭に
c jnpw js xntj_jmntj. w	アヌビスこそは 西方者達の先導者
cnDtj js xntj_sp;. wt j;btj. t	アンジュティこそは 東の州共の先導者

a wcD\_cn は、船の限定符を伴うことから、その一種であることが分るが、詳細は不明。ここ以外には、Pyr224a に 1 回出現するのみである。

c xntj 「先導者、第一人者、筆頭」は、前行の xnt 「～の前・中に」「～の先頭に」（前置詞）からのニスバ派生形である。前置詞とそのニスバ派生形（名詞または形容詞）との関係は、m と jmj、Hr と Hrj 等、多数見られ、エジプト語では生産的である。ニスバ派生形は、文法上・発音上は標識-j を伴うものの、表記上は省略されることが多いため、前置詞かその派生形かの判断は難しい場合が多い<sup>17</sup>。したがって、例えば上の行 b で擬人的に「錫は生者達の先導者、言葉は霊共の先導者」と訳し<sup>18</sup>、逆に c を「西方者達の先頭に在り、州共の先頭に在り」と訳すことも可能である。何れにしる様々な名詞との結合が予想されるが、実際は特定名詞との結合例が目だち、ここに現れた cnx.w 「生者達」や;x.w 「霊共」との結合は、特に頻度が高い。

以下に高頻度の語結合を挙げる（ニスバ語尾-j の有無は区別しない。用例数は、複数の並行本文を 1 回と数えた場合である）：

語結合	のべ数	用例数	後続名詞の意味
xntj jmntj.w	52x	27x	「西方者（＝死者）達」
xntj ;x. w	52x	26x	「霊共」
xntj cnx.w	36x	18x	「生者達」（内 6 例は、xnt ;x.w と対句をなす）
xntj psD.t(j)	29x	19x	「汎神殿」（xntj X.t psD.t を含めると各 3 回増）
xntj jtr.tj	29x	15x	「神々の集い」
xntj nTr.w	24x	14x	「神々」
xntj zH_nTr	8x	7x	「神の祠」
xntj sxm.w	8x	5x	「諸々の力」（xntj sxm sxm.w 「最高権力」を含むと各 1 回増）

この他、sn.w 「兄弟達」（904c）、s.wt 「座共」（270a）等との用例にも明らかなように、結合する名詞は複数形または双数形、あるいは集合名詞である。いずれの場合も最高神のイメージと結びついていると思われる。これに対し、意味・形式共に単数の名詞と結合すれば、前置詞である蓋然性が高い。以上に加え、同じ語根を持つ動詞に xntj 「～を凌駕する」があるので、その分詞形としての xntj 「～を凌駕する者」も予想される<sup>19</sup>。さらに、他の前置詞と結合した複合前置詞の m\_xnt(j) もあれば、名詞の mxnt(1) 「額」（33a）、mxnt(2) 「侍従」（2242a）もあり、古典期のように限定符が頻繁に使用されず、また表記も一様でない PT においては、文脈次第ではこれらの語の判別が難しい<sup>20</sup>。

(Pyr221)

a Htp=wj xrt.k	汝の状態は何と安らか
;x.k h;	汝の魂は おお 王よ
m_cb sn.w.k nTr.w	汝の兄弟たる神々の中で
b nS=wj sj	そは何たる変容ぞ
nS=wj sj	そは何たる変容ぞ
jnD jms.w.k	汝の子らを守れ

z;w Tw	汝を護れ
c Dr.k pw jm t;	地上のこの汝の境界を
Dd_mdw zp 4	呪文 4 回
wnx D.t.k	汝の身に纏え
jw=t.k xr.sn	汝彼らの許に達するように
<b>第225章</b>	
(Pyr222)	
a wH Tw (.)  pn	身を奮立たせよ これなる王よ
jnn Tw (.)	身を巡らせよ 王よ
b Sm n.k	汝のために発て
wD_mdw.k n j;.wt Hrw	汝ホルスの丘に命じ給え
wD. k mdw n j;.wt stX	汝セトの丘に命令し給え
c jDd. k mdw n j;.wt wsjr	汝オシリスの丘に言葉を発し給え
(Pyr223)	
a Htp_Dj_nsw.t	王の賜物
z;k Hr nst.k	汝の息子は汝の玉座の上に(あれ)
Hbs.k b;	汝の衣は 豹皮
Hbs.k xsdD	汝の衣は キルト
b Sm.k m x;w.tj	汝サンダルで進み給え
rx.k k;	汝牡牛を屠殺し給え
(Pyr224)	
a Sm. k m wcD_cn	汝ワアジュ・アン船で進み給え
m s.wt.k nb	汝のあらゆる居場所に
m scH.k nb	汝の全威信を掛けて
b nHb.t.k xnt cnx.w	汝の蓮の蕾の錫は生者達の先頭に
mdw.k xnt ;x.w	汝の言葉は霊共の先頭に
c jSm smsw	長老は進む
jnD.f z;.f	(彼がその)息子を守るために
d wnx.tj Dd.k	汝の身に纏い給え
jw=t.k xr.j	汝が我が許に達するよう
nxx n.k////////	汝に属するように////////

c FE は、前後が2人称に挟まれ全体が呼び掛けであることから、人称接尾辞を2人称のkに読み替える。その場合は、「長老(字義どおりには、年長者)よ進め、(汝が)汝の息子を守るために」となる。

以下に続く一連の章節 Pyr225-249は、蛇を初めとする害獣に対する呪詛から成り立っている。恐らく祭儀執行に関する祭器類と思われる語義不詳の語句が続出するが、以下の対訳ではカタカナ転写するのみで一々断っていない。呪文の類であれば、語義が不透明であればあるほど有難味が増し、呪力が発揮されたことは想像に難くない<sup>21</sup>。もっとも、そのような見方は、現代の都市環境の中でしか通用しない余りにも功利的な見方と言うべきか。いずれにしろ、供物が途切れることなく捧げられる限り、皮肉にも小動物



を呼び込むことになり、結果的に、それらを狙う蛇共を誘い出すことにもなったであろう<sup>22</sup>。リチュタイムは、これらの蛇払いの呪文を日常生活に根ざすものとしている<sup>23</sup>。

蛇除けの呪文には、Pyr622以下にも多くの節が割かれる。そのような断続的に繰り返し出現する本文がPT全体に散在することから、PTの原典とも称すべきものが別に存在したと推測されるのである<sup>24</sup>。

## 第226章

(Pyr225)

a	Snj ncw jn ncw	蛇は[別の]蛇により捲きつかれる、
b	Sn bHz x; jbH.w pr m Hzp	歯のない子牛に捲きつく 耕地から出た(蛇によって)。
c t;	jcm n.k pr. t jm.k	地よ 汝から出た者を汝のために呑み込め
	hjwt sDr	怪物よ 横たわれ
	zbn	這って行け

(Pyr226)

a	xr Hm psD.t m mw	ペリカンの君は水の中に落ちた
b	Hf;w pnc m; Tw rc	蛇よ 身を巡らせよ ラアが汝を見る(故)

## 第227章

(Pyr227)

a	Hsq m tp k;_km wr	偉大な黒牛の頭を切断した者よ
b	hpnw Dd.j nn r.k xsr_nTr Dd.j nn r.k	蛇よ 我汝に対しかく申す 神を追払う者よ 我汝に対しかく申す
c	pnc Tw xbx t; Dd.j nn r.k	身を巡らせよ 地に潜れ 我汝に対しかく申す

## 第228章

(Pyr228)

a	xr Hr r Hr m;n Hr Hr	顔は顔に落ちる 顔は顔を見る
b	prj nm;b km w;D r.s cm=n.f n.f jnsb=n.f	それ故に黒と緑の斑の小刀は出る 彼は彼の舐めたものを自ら呑込んだ

## 第229章

(Pyr229)

a	cn. t tw nn nt jtm	この爪こそは アトムのもの
b	Hr. t Tz bqsw nHbw_k;w sz;t Xnw m wnw	ネヘブ・カーウの脊椎を押えたもの ウヌーで騒動を鎮めたもの
c	jxr zbn	倒れよ 這え

b Hr.t と sz;t とは、女性名詞 cn.t「爪」に掛る分詞形。ネヘブ・カーウは男神である。語源的には「k;w(魂共)を nHb(結合する)者」の意味か(FD,p. 136)。

c jxr は、Pyr228aの xr と同じ語根に語頭添加音 j-がついた形式である。語頭音添加については、既に Pyr 216a の語注において言及した。

## 第230章

(Pyr230)

a nSf.k m t;	汝のネシェフは 地に
spH.t.k m b;b;	汝のセプヘトは 穴に
b stj mw	注げ 水を
cHc Drj. tj	二羽の鳶が立てる(間に)
c tmm=w r;k jn Sms.t	責め具により 汝の口は塞がれ
tmm=w r; n Sms.t jn m;fd.t	マーフデトにより 責め具の口は塞がれ
d pzH sb;gj jn ncw	ナアウ蛇により 弱りし者は噛み付かれた

b Drj.tj 「2羽の鳶」とは、FDによればイシスとネフチュスの2柱の女神のことである。

(Pyr231)

a j rc	おおラアよ
pzH=n (.)  t;	王は地に噛み付いた
pzH=n (.)  gb	王はゲブに噛み付いた
b pzH=n (.)  jt n pzH sw	彼に噛付いた者の父に王は噛み付いた
c jn z pn pzH (.)	この男こそ 王に噛み付く者
N pzH sw (.)	王は彼に噛み付かない

(Pyr232)

a swt jj r (.)	彼こそが王に(齒)向かって来た者
N Sm (.)  r.f	王は彼に向かって発たない
b Szp 2 n m; ;f (.)	受取れ 彼が王を2度見たら
Szp 2 n dgg.f n (.)	受取れ 彼が王を2度見詰めたら
c pzH. k (.)	汝が王に噛み付く時
Dj.f wc.k	彼は汝を独りにする
m;;.k (.)	汝が王を見る時
Dj.f snnw.k	彼は汝を伴なわせる

(Pyr233)

a pzH ncw jn nc.t	雌蛇から雄蛇は噛み付かれる
pzH nc.t jn ncw	雄蛇から雌蛇は噛み付かれる
b Sn p.t	天が捲きつかれ
Sn t;	地が捲きつかれ
Sn m_Dr Hj rx.wt	民共を守る後見役が捲きつかれる

(Pyr234)

a Sn=tw nTr Sp tp.f	その頭が盲いた神は捲きつかれ
Sn=tw.T Ds.T	君自身が捲きつかれる
nn srq.t	これなる蠍よ
b Tz 2 nw n ;bw jmj.w r; n wsjr	アプーのこの2個の結び目はオシリスの口中にあり
c Tzw n Hrw Hr bqsw	背骨の上でホルスのために結ばれた

a Sn(j)を FE は(be) enchanted と訳している。Pyr233b の Sn(j)と同じ語であり、したがって同じ訳を当てている。原義は「捲きつく、障壁で囲む」の意であり、c の Tz(j)「結ぶ」とも意味的に関連する。一般にカルトゥーシュとして知られる、ファラオ名を囲む片方に結び目のある楕円記号の元々の形が、この文字である。時代と共に魔力による保護の意味合いが強くなった、と考えられている<sup>25</sup>。

### 第231章

(Pyr235)

a qs.k qs	汝の骨は鉛
qs=tw.k	汝は鉛で刺される
jb.w Dr.w jwn.w jmj.w mt;_s.t	邪悪な心臓共は メターセトの中にいる
b sxr.w Hmn pj	セハルーこそヘメン

### 第232章

(Pyr236)

a mt.j mt.j	. . . . .
mt.j mt.j	. . . . .
b ; ; ;	アアア
mw.t.f mw.t.f	彼の母 彼の母
mt.j mt.j	. . . . .
c jdj.tj x;s.t n.j	砂漠は私のために洗われた
m xm wj	我を知らざるなかれ

c は全面的に FE の訳に従う。FE の解説どおり、全体は語義不明としか言いようがない。

### 第233章

(Pyr237)

a xr D.t pr.t m t;	落ちろ 地から出た蛇よ
xr sD.t pr.t m nnw	落ちろ 黄泉から出た炎よ
b jxr zbn	落ちろ 這え

### 第234章

(Pyr238)

a Hr.j Hr.k	我が顔は汝の上に
Hrj rj.t.f	彼のとぐろの上なる者よ
h; Hrj Tz.k	おお汝の背骨の上なる者よ
jmj n;w.t.f	彼のナーウェトの中なる者よ
b Hm n.j	我が許に戻れ
Hkn.tj m Hr.wj snnw	彼女の伴う二つの顔で喜びながら

### 第235章

(Pyr239)

a kw ; ; ;	汝をアアア
jm_gs Hw	フウの傍らで
jm_gs Hw	フウの傍らで

b jw nk n.k

jr.tj rt c; nt jt.j

jj; j |

汝の許に来て結ばれた

我が父の扉の敷居に向かって

ヤヤーヤ |

## 第236章

(Pyr240)

a kbb hjtj bjtt

Ss z; Hjfg.t

m.k pw

ケベブ ヒティ ビティ

ヒイフゲトの息子シェス

それが汝の名

## 第237章

(Pyr241)

a tf jtm

jm jbw

zkrj r pr n mw. t. f

b hjw sDr

無力な唾よ

塵の中の者よ

彼の母の家へ逃げ込む者よ

怪物よ 横たわれ

## 第238章

(Pyr242)

a t n jt.k n.k

jkj\_nhj

b t. k ntk n jt.k n.k

jkj\_nhj

c nbw Hjknw

xcj\_t;w

k;. k pw nn

w;S jr.w n jr.f

汝の父のパンは 汝に

イキー・ネヒーよ

汝自身のパンは 汝の父に(そして)汝に

イキー・ネヒーよ

黄金[の襟飾](と)ヒーケヌーは

ハアイ・ターウよ

ここなるこれは汝の牛

彼の行ない故に[人が]行なう強き者

## 第239章

(Pyr243)

a pr HD. t

cm=n.s wr.t

b cm=n ns HD.t wr.t

N m;.tj ns

白冠は出る

それは大冠を呑み込んだ

白冠の舌は大冠を呑み込んだ

舌は見られない

a,b HD.tを白「冠」と訳すのは、文字から得られる情報による。これは、象形の正確を色濃く残す、他の文字体系には真似のできない、エジプト文字の利点である。

## 第240章

(Pyr244)

a Dt jr p. t

zp; Hrw jr t;

b nr Hrw

xnd.f

蛇は天に

ホルスの百足は地に

ホルスの群れ

彼が踏み付ける[時]

xnd=n(.)  Hr zbn Hrw	ホルスの道を王は踏み付けた
c xm(.)  Nj rx(.)	王が知らねば 王は知らず
c xm.j Nj rx.f	我が知らねば 彼は知らず
(Pyr245)	
a Hr.j Hr.k	汝の上に[我が]顔は
jmj n;w.t.f	彼のナーウトの中の者よ
sT;.tj	汝は引き摺られた
jmj TpH.t.f	彼の小屋の中の者よ
b Xnf.t Hrw xt.t.t;	地を満たすホルスの鍋よ
j hjw zbn	おお怪物よ 這って行け
第241章	
(Pyr246)	
a jXw jnb	壁が捻り出す者よ
q;c.w Db.t	煉瓦が吐き出す者よ
b nj nw pr m r;k r.k Ds.k	汝自らに汝の口から出る者が齒向う

土壁、日干し煉瓦は何れも古代エジプトにおける一般的な建材であった。建材として利用されたそれらの泥の中から害虫、害獣の類が太陽熱によって孵化しあるいは湿気に誘われ這い出すことは、あり得ぬことではない。

## 第242章

(Pyr247)

a cxm sD.t	炎は消え
N gm tk;	火は見つからない
m pr Xrj nbw. t	ヌブートの下の家の中に
b Hf;w pzH txtt pr	嚙付く蛇は家にのさばる
pzH.f	彼は嚙付き
jmn.f jm.f	その中に居座る

## 第243章

(Pyr248)

a Hts.wj Hts.wj n Dmc.wj	ヘテス錫を2本ずつ 2本のジェマア索に
zp 2	2回
t jstj rwj r.k	汝から控えられたパンの如く
b jw.k tr rrj c; <sup>26</sup>	汝まことに ここにありや
jw.k tr rrj jm	汝まことに そこにありや
j Hm Tf	おお奴隸よ 去れ

a の rwj と b の Tf とを、SUK、FE 共に疑問符つきで訳している。これに関連して、FD(p. 147)の自動詞 go away, depart, pass away, advance, 他動詞 expel, drive off, remove, leave, escape を見よ。A(アレン)にはそれらしき言及が見当たらない。不確実なものは敢えて触れないためか。

## 第244章

(Pyr249)

a h; wsjr (.)	おおオシリスたる王よ
jr.t tw nn nt Hrw rwD.t	ここにホルスの鋭い目がある
b dj n.k sj	それを汝に取れ
jmjm.k	汝が強くある[よう]
nr.f n.k	彼が汝を恐れる[よう]
sD dSr. wt	赤壺共を砕け

a 後半は E(963) による復元である。ホルスの目が単数形で使われた例は 378 例に及び、双数形の jr.tj は 11 回例証されるのみであり、複数形の jr.wt は PT に 1 例もない。したがってここをそのように読み取った E の復元は納得できるものである。rwD.t の復元に関連して E が言及する 290 ページには該当事項が見当たらず関連性が不明であるが、PT 中に次のような用例がある：

614b rDj n.k Hrw jr.t.f rwD.t      ホルスは彼の鋭い目(単数)を彼に与えた

b dSr.t は文字どおりには「赤いもの」となるが、Pyr243a,b の HD.t 同様に、エジプト文字から引出された情報である。ここで赤い壺が言及される理由は、蛇除け、魔除けと何らかの関連があると思われるものの、不明である。

## 第245章

(Pyr250)

a jj n.T (.)  pn nw.t	これなる王は汝の許に来たヌートよ
jj n.T (.)  pn nw.t	これなる王は汝の許に来たヌートよ
b qm;=n.f jt.f r t;	彼はその父を地に投げた
fxn.f Hrw m_xt.f	彼はホルスをその後に残した
c rd DnH.wj.f m bjk	彼の両翼は鷹に変じ
jSw.tj m gmHsw	両羽は聖なる鷹に[なった]
d jn=n sw b;f	彼のバーは彼を運んだ
Htm=n sw Hk;w.f	彼の魔術は彼に備わった

(Pyr251)

a wp.k s.t.k m p.t	汝天に座を設けよ
m_cb sb;w n.w p.t	天の星々の間に
b n Twt js sb; wc.t=j rmnw.t Hw	なぜなら汝は独つ星フウの伴
m;k Hr_tp wsjr	汝オシリスの頭上から見よ
c wD.f mdw n b;w	彼が魂共に命ずる[時]
Twt cHc.tj Hrt r.f	汝は彼から離れ立ち
d N Tw jm.sn	汝は彼らの中になく
N wnn.k jm.sn	汝は彼らの中に居ず

## 第246章

(Pyr252)

a m; cHc=t (.)  pn m_cb	これなる王が中に立つのを見よ
-------------------------	----------------

cb.wj tp.f sm;.wj	彼の頭の2本の角は 2頭の野牛のもの
b n Twt js zj km	なぜなら 汝こそは 黒い羊
z; zj.t km.t	黒い雌羊の息子
c ms.w zj.t b;q.t	輝く雌羊が生み
snq.w fd.t w;p.t	4つの乳首を吸わせた
(Pyr253)	
a jj r.Tn Hrw xsbD jr.tj	両目青きホルスが汝らに向って来る
z;.Tn Hrw dSr jr.tj	汝ら両目赤き、
b mr ;.t	一撃激しき、
N xsf b;.f	その力抗い得ぬ、ホルスに気をつけよ
c zbj jn.w.f	彼の遣い共は進む
bT sjn.w.f	彼の先駆け共は走る
d Hww.sn n Dsr.w rmn Hr j;btj.t	彼らは東で腕を挙げる者に伝える

a ホルスの目の色については、29b で既に触れたことがある<sup>27</sup>。しかし、そこでは jr.t\_Hrw 字義どおりには「ホルスの片目」を問題としたため、双数を用いた箇所は、用例数の少なさに触れたのみで、検索対象に含めなかった。ここでは、両目に言及しているだけでなく、新たな色彩名が加わっている。ホルスの目の「色」について、再度整理すると(出現回数の後の数字と記号は例証箇所を指す)：

km	「黒い」 1 x (33a)；語末の-t は jr.t「目」(女性単数形)との一致。以下、同様。
HD	「白い」 5 x (33a, 48ab, 96a, 108a)
w;D	「緑の」 4 x (96c, 107a, 108c, 1202b)
xsbD	「青い」 1 x (253a)
dSr	「紅い」 2 x (253a, 901a)；文字はフラミンゴを象る。
jdmj	「赤い」 1 x (1202b)

以下の例証箇所では、片目ずつまたは両目揃って目の色が対比的に用いられている。

0033a	m jr. t_Hrw km.t HD.t	黒と白とのホルスの目を取れ
0096a	m n. k jr. t_Hrw HD.t xwj sSd.f sj	白いホルスの目を取れ、セトにそれを着けさせるな
0096c	m n. k jr. t_Hrw w;D.t xwj sSd.f sj	緑のホルスの目を取れ、セトにそれを着けさせるな
0108b	m jr.t_Hrw HD.t sSd.t=n.f	彼が身に着けた、白いホルスの目を取れ
0108c	m jr.t_Hrw w;D.t sSd.t=n.f	彼が身に着けた、緑のホルスの目を取れ
253a	jj r.Tn Hrw xsbD jr.tj	両目の青いホルスが汝らに向って来る
	z;.Tn Hrw dSr jr.tj	汝ら両目の赤いホルスに気をつけろ
0900ab	Sc.t.k pw jr.t_Hrw wD;t HD.t	汝の恐れは健全なホルスの目、即ち白冠である
0901ab	Htm.j Tw m jr.t_Hrw dSr.t	我、汝をホルスの目即ち赤冠で飾ろう
1202bc	sSd pw nj w;D.t n jdmj sT;j m jr.t_Hrw	ホルスの目から織られた緑と赤との鉢巻

b mr は前行の xsbD、dSr と同じく形容詞であり、それらの形容詞と同様、後続名詞と直接属格を構成する。名詞;.t は、Pyr297c にも再び現れる(後述)。

(Pyr254)

a Sm.t wc pn jmj.k	汝の内なるこの一者は発つ
Dd.w dwn_cnwj	ドゥエン・アンウェイは言う
wD.f mdw n jt.w nTr.w	彼は神々の父祖に命じる
b jgr n.k nTr.w	神々は汝に対し沈黙する
dj=n psD.t c. sn jr r;sn	九神は彼らの口に彼らの手を置いた
c tp_rd.wj wc pn jmj.k	汝の内なるこの一者の前で
Dd.w dwn_cnwj	ドゥエン・アンウェイは言う
wD.f mdw n jt.w nTr.w	彼は神々の父祖に命じる

a, c のドゥエン・アンウェイは、Pyr27、28においてはホルス、セト、トトと並び、Pyr17、159ではこれら3神にさらにオシリス、ラア、アトムを加えた神々と並び称されている。したがって、それらに匹敵する重要な神格であったと思われる。一方、ペピⅠ世(P)以降の本文として残るPyr1098においては、少なくとも上の主要神の中に含まれない神々と同列に扱われている。この神々の中では、内臓の守護神である4神が比較的名を知られているに過ぎない。もっとも、さらに後代に当たるメルエンラア王(M)以降の本文が残るPyr1613で再びホルス、セト、トトと並び称されていたり、祭に言及するPyr860b、2237bではオシリスに次ぐ神としての描写もあるので、単純に、時代と共に神格が降格あるいは昇格したとは言えないようである。時代的な盛衰の反映か、複数の伝統の存在か、あるいは職能による序列化の相違か、今後解明すべき課題の一つである。

a wc の原義は数の「1」。PTでは例証箇所のはほぼ全てが肯定的な含蓄と共に用いられ、否定的なニュアンスを伴う用例は僅かである。次の4群に分類できる：

## (1)「唯一独特の存在」

0293b (.)  pw wc k; n p.t	私は一者、天の牡牛(故に、幸福だ)
0309e (.)  pj Hr wc.f smsw nTr.w	王はその独自さの上にある、神々の長子
0853a jnD_Hr.k wc Dj.f rc_nb	ごきげん麗し一者よ、日々を生き抜く方よ
0854b wc Dd=n jt.f s;; Dd=n nTr.w	父が語り掛ける一者よ、神々が語り掛ける賢者よ
1078e jn wc pw Dj rc_nb	日々を生き抜く一者により
1226c wnm (.)  pn t. f pw wc.t wc	王はその唯一無二のパンを一人で食べるように
1381b jn.t.f n.k wc.t sxm.tj	彼は汝の許に一者たる二重冠を齎す
1824h h; wsjr (Nt)   Twt nTr sxm.w wc.t	おおオシリスよ、汝は強力かつ独特の神
1920c jT n.k wr.t dw; js wc.t sk xft	敵を粉碎する唯一の星として冠を受けよ
2041a (N)   pw wc n p.t sxm_jr.f xntj nw.tj	王は天の一者、双天の先頭の有力者
2138g jnD_Hr.k b; jmj dSr.f wc Dd=n /////	ごきげん麗し血の中の霊よ、・・・語る一者よ

## (2)「肯定すべきペアまたはグループの一人」

一組の神	
0472d wc.sn m pn gs wc.sn m pn gs	彼ら(神々)の一人はこちらに、一人はあちらに
1255c wc.t.sn m jmn.t wc.t.sn m j;b.t	その(女神の)一人は西から、一人は東から
1255d wc.t.sn m H;t wc.t.sn m Drj.t	その(女神の)一人は鷹として、一人は鷹として
1424b wc m_xt (.)  pn wc tp_c.wj.j	(神々の)一人を私の前に、一人を私の後に
1424c wc dj.f mw wc dj.f Sc	(神々の)一人は水を与え、一人は砂を与える



## 一群の神々

0725c n Twt js <b>we</b> m nTr.w	なぜなら汝は神々の一員だから
1441c (.)  pw <b>we</b> jm. Tn nTr.w	神々よ、王は汝らの一員だから
1483a n (.)  js pw <b>we</b> m fdw jpw nTr.w	なぜなら王はこれら 4 神の一人だから
1510a (.)  pw <b>we</b> m fdw jpw nTr.w ms.w gb	王はゲブが生んだこれら 4 神の一人である
1697a jj n.n <b>we</b> jm.n	我らの一人が我らの許に来る(と神々が言う)
2046c (.)  <b>we</b> jm.sn	王は彼ら(神々の)一人である
2057a (.)  pw <b>we</b> m fdw jpw wnn.w	王はこれら 4 存在の一人である
2059b (.)  <b>we</b> jm.sn Hzj n k; p.t	王は、天の牡牛が愛でる者の一人である
2085b wn.t (.)  pn m <b>we</b> jm.sn	これなる王は(記録された)彼らの一人である
2253b sjc.f (.)  n nTr c; n swt js <b>we</b> jm.sn	王は大神の許に昇る、彼が彼らの一人ゆえに

## ホルスの目等

00400e wsjr (.)  jT jr.t_Hrw <b>we</b> .t	オシリスたる王よ、ホルスの片目を受取れ
004014a wsjr (.)  jT jr.t_Hrw <b>we</b> .t	オシリスたる王よ、ホルスの片目を受取れ
2276a wsjr (.)  m n.k jr.t_Hrw <b>we</b> .t	オシリスたる王よ、ホルスの片目を取れ
0522c <b>we</b> ;ms.wj Hrw	ホルスの 2 本の錫の 1 本
0524d <b>we</b> jwn.wj Hw.t_c;	大殿の 2 本の柱の 1 本
1072b <b>we</b> .t r p. t sn.tj r t;	(食物の)一つは天に、二つは地に
1751c <b>we</b> n wcn snw n sDd	(漕ぎ帰るためのオールの) 1 本はウアン製、

## (3) 中立的

2083d jxm.f D.t.f m <b>we</b> rnp.tj n xpr	彼はケブレレの季節の一つに体を弱めた
--	--------------------

## (4) 「孤独な者、孤立した者」

0232c pzH.k (W)   Dj.f <b>we</b> .k	汝が私を囓んだら、私は汝を一人にする
0329c Dd jr.k Htp <b>we</b>	私は「一人で休む者」と言われる
1226c wnm (.)  pn t.f pw <b>we</b> .t <b>we</b>	王はその唯一無二のパンを一人で食べるように
1941a (.)  pw wnm n.k nw <b>we</b> .t	王よこれを一人で食べよ

上の分類に従えば、Pyr254は(1)の用例に当たる。ここに描写された「一者」は、神々さえも発言を躊躇するような権限の大きさから「主神」とも訳し得よう。FEはthe Unique Oneと訳しているが、日本語で「唯一神」と訳すと一神教的ニュアンスを醸し兼ねない。あくまでも万の神々の中の、と同時に唯一独特の存在ということを強調する訳語が求められる。いずれにしろ、アマルナ時代を遥かに遡る頃に、「唯一独自の神」という観念が成立していたことは、注目すべきことと思われる。

## (Pyr255)

a cHc r c;.wj ;x.t	地平の両扉に向かって立て
jzn c;.wj qbHw	天空の両扉を開けよ
b cHc.k xnt.sn	汝彼らの先頭に立つよう
gb js xnt psD.t.f	彼の九神を先導するゲブのように
c cq.sn	彼らは這入り
jH.sn sDb	彼らは悪を打ち倒す
pr.sn	彼らは出て

f;.sn Hr.sn (Pyr256)	彼らはその顔を上げる
a m;.sn Tw mjn js xnt jtr.tj	彼らは汝を見る 二つの臣下団を司るミン神の如く
b cHc cHc H;.k cHc sn.k H;.k cHc ns.k H;.k	汝の後に 立つ者は立つ 汝の後に 汝の兄弟は立つ 汝の後に 汝の近親は立つ
c N sk.k N tm.k	汝は滅びず 汝は尽きず
d nxj rn.k xr rmT xpr rn.k xr psD.t	汝の名は人々の許で栄え 汝の名は九神の許で存続する
<b>第247章</b>	
(Pyr257)	
a jr=n n.k z;.k Hrw	汝の息子ホルスは汝のためになした
b sd; wr.w m;=n.sn Sc.t jmj.t c.k	大いなる者達は戦慄く 汝の腕の中なる武器を見て
c pr.k m dw;.t (Pyr258)	汝が冥界から現れる[時]
a jnD_Hr. k s;=j	ようこそ 賢者よ
b qm;=n Tw gb ms=n Tw psD.wt	ゲブは汝を創造した 九神は汝を産んだ
c Htp Hrw Hr jt.f Htp jtm Hr rnp.wt.f	彼の父にホルスは安らぐ 彼の年々にアトムは安らぐ
d Htp nTr.w j;b.t jmn.t Hr wr.t xpr.t m_Xnw c.wj msw.t nTr	偉大な方に東西の神々は安らぐ 神を産んだ方の両腕の中に存在する(ところの)

d xpr.t の女性語尾 t は、女性形 wr.t 「偉大な方」に掛かるからである。

(Pyr259)	
a (.)  pj (.)  m; (.)  pj (.)  ptr	これなる王よ 王よ 見よ これなる王よ 王よ 御覧あれ
b (.)  pj sDm (.)  pj (.)  wn jm	これなる王よ 聞き給え これなる王よ 王よ そこにあれ
(Pyr260)	
a (.)  pj (.)	これなる王よ 王よ

Tzw Tw Hr gs.k	汝の脇に身を起こせ
jr wD.j	我が命令を行なえ
b msDD qdd sb;gj	惰眠を憎む者よ[力]殺がれた者よ
cHc jmj ndj.t	ネディトの中の者よ立て
c jr.w t.k nfr m p	汝の美しいパンはべに用意された
Szp sxm. k m jwnw	オンで汝の支配を受取れ

b,c の ndj.t、p、jwnw は、何れも都市名である。それは、限定符 O49に明白である。しかし、ローマ字転写ではその情報が脱落してしまう。同様に、同音異義語の多くは限定符を残すことで弁別可能になると思われるが、標準的な転写方式ではエジプト語のその利点が全く利用されないままである<sup>28</sup>。

(Pyr261)

a Hrw pw wD=n. f jr. t n jt. f	ホルスこそが彼の父を助けるよう命じられた
nb qrj s;H n. f jsd stX	嵐の主、彼にはセトの涎(=暴風雨)が封じられた
b Tzw. f Tw	彼が汝を持上げる
swt Tzw. f jtm	彼こそが アトムを持上げる

a s;H は、FD と A(p.562)とに s;H 1 に(1)kick, (2)reach, arrive at;touch、s;H 2 に endow (with)が見られるのみであるが、FE は is forbidden (?)と訳す。nb qrj は PT 全体の中で、ここにしか見られない語句である。節全体は、FE を参照しながら、SUK に基づく訳である。

## 第248章

(Pyr262)

a (.)  pj c;	これなる王は 大いなり
pr=n (.)  jmj.t mn.tj psD.t	九神の両腿の中から王は出た
b jwr (.)  jn sxm.t	王はセクメトにより受胎された
jn Szmt.t ms.tj (.)	シェゼムテトにより王は産まれた

a 後半から b に懸けての言い廻しは、Pyr2206c にもう一度現れる。セクメトとシェゼムテトとは、同一神格または同一機能を担う神格ということになる。PT では、セクメトは心臓の守り神として、「偉大なる」という形容詞を伴って Pyr1547c に再度出現するが、シェゼムテトという女神は、この 2 箇所以外には現れない。ただし、限定符 N18 を伴う地理的概念としての Szm.t は、Hrw\_Szmtj 即ち「シェゼムティのホルス」という連語形で頻出する<sup>29</sup>。同様の語構成を持つ Hrw\_x;tj 「ホルアクティ＝地平のホルス」が連想されるところであるが、次に引用する Pyr342 は、両者の関連性を伺わせながらも、むしろホルスとの対応あるいは神格としての存在を示唆するような一節である：

a sk.w zxn.wj p.t n Hrw	D;f jm jr ;x.t xr Hrw_x;tj
b sk.w zxn.wj p.t n (T)	D;f jm jr ;x.t xr Hrw_x;tj
c sk.w zxn.wj p.t n Szmtj	D;f jm jr ;x.t xr Hrw_x;tj
d sk.w zxn.wj p.t n (T)	D;f jm jr ;x.t xr Hrw_x;tj

天の葦舟がホルスのために用意され

彼はそれにより地平へ、ホルアクティの許に渡る

天の葦舟が王のために用意され      彼はそれに乗り地平へ、ホルアクティの許に渡る  
 天の葦舟がシェゼムティのために用意され      彼はそれに乗り地平へ、ホルアクティの許に渡る  
 天の葦舟がホルスのために用意され      彼はそれに乗り地平へ、ホルアクティの許に渡る

これに加え、さらに Pyr337を参照すると、これらの神格の一体性が一層明らかとなる：

a dj.w zxn.wj p.t n rc      D;f      jm jr ;x.t  
 b dj.w zxn.wj p.t n Hrw\_;xtj      D; Hrw\_;xtj      jm      xr rc  
 c dj.w zxn.wj p.t n (W)|      D;f      jm jr ;x.t      xr rc  
 d dj.w zxn.wj p.t n (W)|      D;f      jm xr Hrw\_;xtj      xr rc

天の葦舟がラアのために用意され      彼はそれに乗り地平へ渡る  
 天の葦舟がホルアクティのために用意され      ホルアクティはそれに乗りラアの許に渡る  
 天の葦舟が王のために用意され      彼はそれに乗り地平へラアの許に渡る  
 天の葦舟が王のために用意され      彼はそれに乗りホルアクティの許にラアの許に渡る

この他、PT には「クジャク石」の意味を持つ Szm.t も出現する。

(Pyr263)

a sb; spd H;t      眉秀でし星  
   jw Sm.t      遥かを行く者  
   jnn xr.t Hr.t n rc rc\_nb      毎日ラアに遠くの産物を運ぶ者  
 b jj=n (.)| r s.t.f tp. t nb.tj      王は来た 二柱の女神の上の彼の玉座に  
   xc (.)| m sb;      王は輝く 星として

#### 第249章

(Pyr264)

a j j;;w.wj      おお 二人の闘士よ  
   Dd mj n Spsj      さあ貴人に語れ  
   m rn.f pw      それが彼の名で[あれ]  
 b (.)| pj nw n zSzS      これなる王は ゼシュゼシュの花  
   wbn m t;      地から生える[ところの]  
 c web c (.)|      王の腕は清められた  
   jn jr s.t.f      彼の玉座を用意した者により

(Pyr265)

a (.)| pj r Sr.t sxm wr      これなる王は 大力の鼻先に  
 b jj=n (.)| m jw n sjsj      火の島に王は来た  
 c dj=n (.)| m;c.t jm.f      王はそこに正義を置いた  
   m s.t jzf.t      邪惡の代りに  
 d (.)| pj r sSrw      これなる王は 亜麻の衣へ[向かう]  
   z;; jcr.t      蛇が守る[ところの]  
 e grH pw n;gbj wr      大洪水の夜は  
   pr m wr. t      大いなる者から出た

(Pyr266)

a xc (.)|      王は輝く

m nfrtm	ネフェルテムとして
m zSS n sSn	蓮の蕾として
r Sr.t rc	ラアの鼻先に
b pr. f m ;x.t rc_nb	彼が毎日地平に出る[と]
wcb nTr.w n m;f	神々は彼を見て清められる
<b>第250章</b>	
(Pyr267)	
a (.)   pj Hrj k;w	これなるは、カー共の上なる王
dmD jb.w	心を一つにする方
j=n Hrj s;	と、知恵を担う方は言う
wr.w	偉大な方
b Xr mD;t_nTr	神の書を託された方
sj; jmn.t rc	ラアの右のシイア [=知性]
c jj=n (.)   r s.t.f Hr.t k;w	カー共の上なる彼の玉座に王は来た
dmD.j jb.w	私は心を一つにした
Hrj s;	知恵を担う方よ
wr. tj	偉大な方よ
d xpr (.)   m sj;	王はシイアとなる
Xr mD;t_nTr jmn.t rc	ラアの右の神の書を託された(ところの)

a j=n は発言内容が示された後に使われる。

b mD;t\_nTr 「神の書」とは何か。mD;t は、古典期のエジプト語で巻物を表す。古王国時代のパピルスの巻物としては、前23世紀の実物が残存している<sup>30</sup>。

(Pyr268)

a nDD m c (.)	王の腕で守られた者よ
b j=n (.)	王は言う
Dd jmj.t jb wr.t	偉大な者の心の中を語る者よ
m Hb jnsj	赤布の祭において
c (.)   pj	これなるは王
(.)   pj	これなるは王
sj; jmn.t rc	ラアの右のシイア
d snk_jb xnt TpH.t nw	黄泉の洞窟を司る気位高き者

d snk\_jb の訳は、それが高官には分不相応なものの、王には不適でないという FE の注に従う。

**第251章**

(Pyr269)

a j Hr.w wnw.t tp_c.wj rc	おお ラアに先んじ時を支配する者よ
jrj.j w;t n (.)	王のために道を備えよ

b sw; (.)| m\_Xnw pXr. t nt cH; w Hr  
(Pyr270)

顔が戰士達の仕える中を王は通る

a jw (.)| r s.t.f tw  
xntj s.wt H; nTr dhn

この彼の玉座へ王は来る

b Db; Hnw.t spd. t nx.t

大神の後の座共の先導者は

c Xrj js ds spd zw; Htj.t

力ある強い角を取戻した者は

喉を切る鋭き剣を頂く者として

d wDc.t Snw m\_tp k;  
s;hd.t jmj.w kkw

雄牛の前から諍いを除く者は

闇の中なる者共を揺り動かす者は

e Hnw.t wsr.t H; t nTr c;  
(Pyr271)

大いなる神の後の強き角

a jw d;=n (.)| zzw  
sqr=n (.)| H; t.sn

罰すべき者を王は従えた

彼らの額を王は撃った

b N xsf=n (.)| m ;x.t

地平で王は敵対したことがない

## 第252章

(Pyr272)

a f; Hr.Tn  
nTr. w jmj.w dw; t

汝らの顔を上げよ

黄泉の中なる神々よ

b jj=n (.)|  
m; .Tn sw xpr m nTr c;

王は来た

汝らが大いなる神となった彼を見る[ように]

c jbz (.)| m sd;  
Db; (.)|

王が奮えて先触れすれば

王は衣を掛けられる

(Pyr273)

a mkj. Tn r Dr.Tn  
wD (.)| mdw n rmT

汝らみずからを守れ

王が人々に命じ、

b wDc (.)| mdw n cnx.w m\_Xnw jdb rc

王がラアの領地で生者達に判決を下し、

c Dd (.)| r jdb pw web

王がこの清浄な領地に向かって語る[故に]

jr=n.f Hms.f jm Hnc wp nTr.wj

そこは彼が二神を仲裁する者と共に彼の座所とした

(Pyr274)

a sxm (.)| jr\_tp.f  
;ms (.)|  
twr.f (.)|

王は彼に対して力溢れる

王は爵を担い

彼は王を敬う

b Hms (.)| Hnc Xnn.w wj; rc

王はラアの聖船の漕ぎ手達と共に座す

c wD (.)| nfr.t

王は美しきことを命じる

jr.f sj

彼はそれを行なう

(.)| pj nTr c;

王こそは大いなる神

a jr tp.f を E(806) は複合前置詞 jr\_tpj.f とし、ここを “ihm gegenüber machtig sein” と訳す。本稿はこれに従う。FE は “The King has power on his head” と訳している。構成要素の原義が薄れた複合前置詞は古エジプト語の段階において既に発達していて<sup>31</sup>、本稿中の本文にも tp 「頭」を構成要素とする複合前置詞、m\_tpj (Pyr270d) や Hr\_tpj (Pyr251b) が見えている。

## 第253章

(Pyr275)

a wcb=n wcb=n m sx.t j;rw	ある者が葦の原で清めに清めた
b wcb=n rc m sx.t j;rw	ラアが葦の原で清めた
c wcb=n wcb=n m sx.t j;rw	ある者が葦の原で清めに清めた
d wcb=n (.)  pn m sx.t j;rw	これなる王が葦の原で清めた
e c n (.)  pn m c rc	これなる王の手はラアの手である
nw.t Szp c n (.)  pn	ヌートよ これなる王の手を取れ
f Sw sS.w sw	シューよ 彼を持上げよ
Sw sS.w sw	シューよ 彼を持上げよ

a-d wcb=n について、SUK(1, SS. 295-6)は、節頭が sDm=n.f 定動詞形で2番目がその主語として機能する同じ sDm=n.f 語幹の分詞形とする解釈を否定し、主語が“latent”つまり形式上欠けた文とする。ただし、翻訳は「身を清めた者は身を清めた」としている。FEも同様の訳である。分詞に完了形・未完了形の区別はあっても、接辞による拡張語幹はエジプト語の分詞体系にない以上、妥当な説であり、本稿もこれに従う。SUKはさらに、表記上の特徴として、Tの表記がWの表記に較べ表音要素や限定符を付加する傾向があることを指摘している<sup>32</sup>。

e, f シューは大気の神である。天空の女神ヌートを両手で持ち上げてヌートの配偶神である大地の神ゲブから引き離している場面は、よく描かれたようである<sup>33</sup>。そのような図像からも、このヌート神が夜毎、朝毎、太陽神ラアを呑み込みまた産むとエジプト人が想像していたことが知られるのであるが、後出の Pyr 299にも、それを示唆する描写がある。ここは、シューがヌートを天の高みへと持ち上げる動作に連れて、太陽神ラア即ち王が天空の高みに引き上げられることを祈願しているのであろう。因みにシューの配偶神は、Pyr288aに並んで出てくる湿気の女神テフヌト(tfn.t)である。

## 第254章

(Pyr276)

a j dj wr.t n k; nxn	ネケンの雄牛のため偉大な者が燻浄される
b ns hh n (.)  pn r.Tn H; w k;r	これなる王の火炎の火は 社の裏なる汝らに向く
c j nTr c; xmm rn.f	おお 名(も)知れぬ大いなる神よ
p; t Hr s.t n nb_wc	供え物は唯一の主のための場所に

(Pyr277)

a j nb_x; t jrj s.t n (.)  pn	おお 地平の主よ これなる王に席を設けよ
b jr tm. k jrj s.t n (.)  pn	もし 汝がこれなる王に席を設けぬなら
jrj=k; (.)  f; t m jt.f gb	王はその父ゲブに呪いを掛けるであろう
c t; N mdw=n.f	地はもはや語るまい
gb N w;=n.f	ゲブはもはや身を守れまい

b 前半が条件節、後半はその帰結節である。

c w;=n.f については、FEは“protect (?) himself”、A(777F;p. 568)は w;j, “become distant”、ここでは「逃れられまい」とする。決め手のない語義はさておき、文法的には、b 後半以降を前半の条件節を受ける帰結節

として解釈することに違いはない。しかし、同じ帰結節とは言え b 後半に使われているのは sDm=k;f 形で、c で 2 回使われているのは sDm=n.f 形である。条件節と帰結節でこのような組み合わせがあるのは、PT ではここだけである。他には以下のような組み合わせの例がある：

0297b/c jr tm.k dr Tw Hr s.t.k w;H.k n.f scH.k r t; / jw=k; (W)|

0495c jr pr nb.f N xm.f Htp.t Dj

1055a jr mt.j (P)| sxm k;f //////////////

1223a/b jr wdfj D;;Tn (.)| mXn.t tw / Dd=k;f rn.Tn pw n rmT ntj (M) | rx. j

1565c jr Dd.sn r.f jn m jrj n.k nn

2052a jr rDj.t wt (N)| jxr wr.t Hr\_c.wj (N)|

297b/c もし汝が席を動かず、彼のために印璽を地に置かぬなら/王は来るであろう

495c もし彼の主が下るなら、彼は供えられた供物を忘れないであろう

1055a もし王が死んだら、彼の魂が力を得るであろう

1223a もし汝らが王を舟で渡すのが遅れたら、彼は知る人(皆)に汝らの名を明かすであろう

1565c もし彼らが彼に「誰が汝にこのようにしたのか」と尋ねるなら、(帰結節なし)

2052a もし王が包帯を巻かれるようにされたら、大いなる者は王の前に倒れるであろう

したがって jr で始まる条件節に応ずる帰結節において、sDm=k;f 語幹を用いる例はここ以外にも Pyr297b/c と Pyr1223a/b とに 2 つの用例があり、その他に 3 例の sDm.f 語幹の使用例があることになる。語幹拡張素 k; を伴う語幹の意味は、|未来| と |要請| または |命令| である<sup>34</sup>。したがって、次のような条件節と命令節との組み合わせに近い用法かもしれない：

1252c/d jr prj.f m sb; pw jmntj n p.t / jnj n.f sb; pw rsw n p.t

1252e/f jr prj.f m sb; pw j;btj n p.t / jnj n.f sb; pw mHtj n p.t

1252c/d もし彼がこの天の西門から出るなら、彼のためこの南門を使え

1252e/f もし彼がこの天の東門から出るなら、彼のためこの北門を使え

因みに1435－1440に懸けては、同じ sDm.f 語幹の対比に対し、SUK、FE とともに帰結節(a,c)に条件節(b,d)が続くパターンを読み込んでいる。いわば接続詞 jr を用いない条件節である。帰結節(A)の方は節の進行につれ構成要素が入れ替わるのに対し、1 行措きに織り込まれる条件節(B)の方は、ほぼ同一語句からなる。

#### A. 帰結節<sup>35</sup>

1435a xsf.w ms.t N\_Dr.f m ;x.t

地平における「無限」の誕生は禁じられるであろう

1435c xsf.w msw.t srq.t

セルケト神の誕生は禁じられるであろう

1436a xsf.w jdb.wj jr Hrw

両岸はホルスから遠ざけられるであろう

1436c xsf.w msw.t s;H

オリオンの誕生は禁じられるであろう

1437a xsf.w msw.t spd.t

シリウスの誕生は禁じられるであろう

1437c xsf.w bnt.wj/btj.wj jr rc z;.wj.f mr.wj.f

彼の愛息子たる 2 匹の猿はラアから遠ざけられるであろう

1438a xsf.w msw.t wp\_w;.wt m pr\_nw



ヌウの宮における「道を開く者」（アヌビス）の誕生は禁じられるであろう

1438c xsf.w rmT jr nsw.t z; nTr

人々は神の御子たる王から遠ざけられるであろう

1439a xsf.w jzw.t.k nt jxm.w\_sk jr Xn.t.k

汝の「不滅の星」（北斗七星）の舟子達は汝を渡すことを禁じられるであろう

1439c xsf.w rmT jr mt

人々は死から遠ざけられるであろう

1440a xsf.w rmT jr wnm t

人々は食物を禁じられるであろう

B. 条件節(P が否定辞の w を用いるのに対し、M の方は ; を用いる。)

P1435b/d-38b/d xsf.k w (.)| pn jw. f jr bw ntk jm

M1435b/d-38b/d xsf.k ; jw (.)| jr bw ntk jm

もし汝が、私に汝の居場所に近づかせないなら

P1439b xsf.k w sn jr rDj.t h; (.)| m wj;.k pw

M1439b xsf.k ; sn jr rDj.t h;j (.)| m wj;.k pw

もし汝が、彼らが私に汝の船で船出させるのを妨げるなら

P1439d/40b xsf.k w h;w (.)| pn m wj;.k pw

M1439d/40b xsf.k ; h;w (.)| m wj;.k pw

もし汝が、私にこの汝の船で船出させないなら

(Pyr278)

a gmj (.)| pn m w;t.f

彼の道でこれなる王が見つける[時]

wnm.f n.f sw mwmw

彼は彼のためにそれを粉々に噛む

b sr Hn.t

ヘネト・ペリカンは予言し

pr psD.t

ペスジェト・ペリカンは出

cHc wr

偉大な者は立ち

c mdw psD.wt

九神は語り

t; Dnj Dnj.t

地は 沈黙を守る

(Pyr279)

a dmD gs.wj

両側は結合され

zm; jxm.tj

両岸は結ばれ

b sSt; w;.wt r sw;.w

道々は旅人に隠され

c sHtm rwd. w r prr.w

土手は登る者に遮られる

d m;c nwH

綱を正せ

D; msq.t

天の川を渡れ

sqr bDw mr Hpww

ヘプウの水路の水面を叩け

d Hpww は、鳥の限定符を持つことと文脈とを考慮すると、水鳥の一種か。前節の 2 種の水鳥も参照のこと。この他、後述の Pyr286e と 1313c、1998b に出現する。何れも鳥の限定符を伴う。

(Pyr280)

a j nr sx.wt.k  
j;d tp\_c. wj jwn sb;.w  
b m;=n.sn jwn knz.t k; n p.t  
c j;x nr k;.w tp\_mjz.f

おお 汝の畑は恐れる  
イアドよ 星々の柱の先で  
彼らは天の雄牛たるケンゼトの柱を見た  
彼の前で雄牛の群は怖気づいた

(Pyr281)

a h; snD sd;  
mds.w tp\_c.wj qrr n p.t  
b wp=n.f t; m rx.t n.f  
hrw mr=n.f jw.t jm

おお 恐れ奮えよ  
天の乱雲に乗る乱暴者共よ  
彼は彼の知識で地を開いた  
そこへ来るのを彼が望んだ日

(Pyr282)

a j jn wr\_sk;.t Hr\_jb dw;.t  
b mk.s jw.s m xsf.k  
jmn.t nfr.t m xsf.k  
c m n;b.wt.s nfr.t  
jw.s jDd.s  
jj ms=n.j  
r(.)| pn

と、冥界なるウェル・スカートは言った  
見よ 彼女は汝の傍に来る  
麗しき西の神は 汝の傍に  
麗しき彼女の木々と共に  
彼女は来て彼女は語る  
我が産みし者は来た  
これなる王に向かって

a 動詞 j は発言の最後に、言わば締め括りとして使用される。このことは、SUK 1 該当箇所訳注に明記されていることと関連する。この他、下の Pyr284a、285a も含め、動詞 j を含む一節が節冒頭に位置するにも拘わらず、直前の節の発言内容を指して「～と誰それが言った」と言っているのである。ここにもまた、現行の節区分の不合理が露呈している。3 例とも、直後に命令形が続いている。

a Wr\_sk;.t は、SUK によれば「開墾地の富者」。FE には sk;「耕す」しか見当たらないが、文字は確かに鋤の象形文字を含んでいる。

(Pyr283)

a wbn cb.f  
jwn sdm  
k; n p.t  
b Tnj jrw.k  
sw; m\_Htp

彼の角は屹立する  
眉描く柱  
天の雄牛  
汝の姿は目立つ  
無事に過行け

(Pyr284)

a Xnm=n.j Tw  
j=t=jn jmn.t nfr.t  
r(.)| pn  
b jz Xn.k r sx.t Htp  
c jT.k Hp.t  
n Hr k;.t.f

我汝を守りたり  
と、麗しき西の神は言った  
これなる王に向かって  
さあ 供物の原へ漕行け  
汝旅して行け  
カート樹の上なる者に向かい

(Pyr285)

- a j jn xntj\_mnj.t.f                      と、ケント・メニトは言った  
 hb.k m t;                                  汝地に沈め
- b r wmt.t.k                                  汝の深みへ  
 r mt.t.k                                    汝の内部へ  
 r sTt.t.k                                   汝の果てへ
- c m;.k rc m jnT.wt.f                      汝は束縛(された)ラアを見る  
 dw;.k rc m prj.wt.f                      汝は解放(された)ラアを崇める
- d m z; wr jmj n sj.w.f                    緋衣(を)(纏った)偉大な者の護符により

(Pyr286)

- a nb Htp.w Dj.f n.k c.f                    平和の主 彼は汝に彼の手を伸べる
- b gf.wt.f znj.t tp.w                        頭共を切る彼の雌猿共よ
- c sw; (.)| pn Hr.Tn m\_Htp                これなる王は汝らから無事に擦り抜ける  
 Tz=n.f tp.f Hr wsr.t.f                    彼は彼の首に彼の頭を乗せる
- d jw wsr.t (.)| Hr mk.t.f                    そして 王の首は彼の胴体の上に  
 m rn.f pw n Tz tp                        頭乗せという彼の名に掛け
- e Tz=n (.)| pn tp n Hpw jm.f              これなる王はそれによりヘプウの頭を乗せる  
 hrw pw n spH ng;w                       荒牛の捕獲の日に

(Pyr287)

- a sk rDj=n (.)| pn                        そこで これなる王が  
 wnm.sn m zwr.sn                        彼らに食べ彼らに飲ませると
- b zwr.sn m bcH.w.sn                       彼らは飲んで彼らは飽いた
- c jx mk.tw (.)| pn jm                      それ故 これなる王はそこで守られる  
 jn m;;w sw                                彼を見守る者達により

(Pyr288)

- a Hkn\_wt. t tp Dcm.s                      彼女の錫上の賞賛の蛇は  
 tfn.t (.)| pn                              これなる王のテフヌト  
 tw;t Sw                                    シュウが捧げ持つ(ところの)
- b ssx.s s.t n (.)| pn                       彼女はこれなる王の席を広げる  
 m Ddw                                    ジェドウで  
 m Dd.t                                    ジェDETで  
 m Ddw.t                                   ジェドウエトで
- c scHc.s j;tj (.)| pn                       彼女はこれなる王の二本の轡を立てる  
 m\_xnt wr.w                               偉大なる者達の前で

a Hkn\_wt.t は、SUK によると動詞 Hkn「賞賛する」と wt.t との合成語である<sup>37</sup>。wt.t 単独では、PT において 2 回しか現れない蛇神である。「ネケン」(=ヒエラコンポリス)に住まい(Pyr900b、単数形)、「王の眉の上」を飾る(Pyr902b、双数形)女神である。しかし、合成語の構成要素としての wt.t という形であれば、jx.t\_wt.t「毒蛇のイクト」(Pyr198b 他 7 回)、rnn\_wt.t「(王冠の聖蛇)エルヌーテト」(4 回)にも現れる。

Dcm「ジャラム錫」は、既に Pyr49i において王位を象徴する他の種々の錫杖と共に現れた。それ以前に

は、白く輝くものの典型として、Pyr48b における「白金」としての用法があった。

tfn.t 即ち女神テフヌトは、既に Pyr169a において <tf[nw]t> との表記で現れた。この表記の違いに関し  
て一言触れるべき点がある。それは、<tf[nw]t> と <tfnt> とが拮抗状態で並存することである。PT における  
その表記は、以下に示すとおり多様である<sup>38</sup>：

	限定符なし	限定符`g07を伴う	限定符`z011を伴う
tf[nw]t	20	5	1
tfn[nw]t	1		
tfnt	13	2 + 1	2
tftn	1		

これを、表音文字[nw]の有無に従ってピラミッド毎に整理し直すと、次のような分布になる：

	W	T	P	M	N
tf[nw]t	1	3	2	7	7
tfn[nw]t	1	—	—	—	—
tf[nw]t`z011	—	—	1	—	—
tf[nw]t`g07	—	—	—	—	5
tfnt	1	—	6	5	1
tftn	—	1	—	—	—
tfnt`g07`g07	—	1	—	—	—
tfnt`z011	—	—	2	—	—
tfnt`g07	—	—	—	1	1

つまり、どのピラミッドにおいても、表音文字[nw]を伴う表記と伴わない表記とが用いられている<sup>39</sup>。こ  
れについて E(46) は、ギリシャ語転写 thephe:nis を参考に、\*t`fj`n`v/\*t`f`n`t と復元し、表音文字 W24  
の音価として[nw]の他に[n]を提唱している<sup>40</sup>。つまり、単子音表記の用法とするのである。それとは逆  
に、[nw]の使用には短母音表記の試みを読み取ることはできないのか、言い換えれば、定説<sup>41</sup>では前期エ  
ジプト語における用例はないとされる Matres lectionis(と言うと用語の拡大解釈的使用になるとすれば、)  
あるいは母音表記の極めて稀な用例として、その可能性を検討する余地があるのではないだろうか。その  
場合、復元形としては\*t`f`nut を提案することになる。

tw;:t が女性形であるのは、女神テフヌトを先行詞とする関係節形だからであり、その主語はシューで  
ある。FD(p.294)には、tw;の訳として、“lean, support, sustain, hold up, set (crown)”等が記載される。

(Pyr289)

a z k.s S n (.)	彼女は王のために池を掘る
m sx.t j;rw	葦の原に
b smn.s ;H.t.f	彼女は彼の領地を据える
m sx.tj Htp	二つの供物の原に
c wDc (.)  pn mdw	これなる王は判決を下す
Hr mH.t_wr.t jmj.wtj Xnn.wj	二人の訴訟者の間の天の川の前で

c mH.t\_wr.t、文字どおりには「大いなる氾濫」は、牛の限定符を伴う。SUK(1,337ページ以下)によると

「雌牛の豊かな乳」との連想に縁る表現とあり、つまり天の川、the Milky Way を意味する。

jmj.wtj という双数形は、SUK に拠る。つまり前置詞 m から派生した形容詞は、直前の名詞の数(この場合は、単数形)ではなく、後続名詞の数(ここでは、Xnn.wj という双数形)に一致している。

Xnn.wj 「争う者達(双数形)」は、SUK によれば、必ずしもホルスとセトとを意味するものではない。その綴りは、同語根 Xnn の派生形である抽象名詞 Xnnw を含めても、用字法において二分される。すなわち、SUK の指摘どおり、W では音声補充(つまり振り仮名的用字)の n が 1 回しか表記されないのに対し、その他のピラミッドでは 2 回表記される。PT における Xnnw 「諍い、争い」の全例証形の綴りをより詳しく示すと、以下のように様々ではある：

[Xn1]n[nw]ー	W0229b,W0304a,W0306c,W0319a
[Xn1]nn[nw]w'a241	T0304a,T0306c,M1227c
[Xn1]nn[nw]w	P1099a,P1099a(古), P1463dA, B(復元箇所), N1099a,N1227c
[Xn1]nn[nw]	N1040c
[Xn1][nn][nw]w	P1320a
[Xn1][nw]	M1463d
[Xn1]nnw	M1099a

いずれにしても表音文字[Xn1](文字コード D33)を伴っていて、同じく D33を用いる語根 Xnj 「漕ぐ」の派生形とは、表記上の区別がつかない。

(Pyr290)

a sk wsr.w (.)  pn	なぜなら これなる王の強さは
wsr.w jr.t tbj	テビィの目の強さ
b nxtw.f nxt.w jr.t tbj	彼の力は テビィの目の力
c jw nD=n sw (.)  pn	そして これなる王は身を守った
m_c jr.w nn jr.f	彼に対しこれをなす者共から
d nHm.w Sbw.f m c.f	彼の手から彼の食物を奪う者共

a,b tbj は、ホルス神の限定符を伴うことから、ここでは神格であることが分る。文脈にも合致する。しかし、1394b では町の限定符を伴うことから地名として機能していることになる。土を掘って墓を作るという文脈にも合う。PT には他に用例がないため、同じ語か否かの断定は難しい<sup>42</sup>。

(Pyr291)

a sk sw wn	なぜなら 彼が在る時
nHm. w ms.wt.f m c.f	彼の手から彼の食事を奪う者
b sk sj wn.t	なぜなら それが在る時
nHm.w T;w m fnD n (.)  pn	これなる王の鼻から息を奪う者
c sjc. w hrw (.)  pn nw cnx	これなる王の命の日を取上げる者
d nxt (.)  pn r.sn	彼らよりこれなる王は強い
xc (.)  pn Hr wDb.f	彼の浜からこれなる王は輝く

(Pyr292)

a jxr H;tj. w. sn n Dbc. w (.)   pn	これなる王の指共に彼らの心臓共は落ちる
b bsk. w. sn n jrw p. t	彼らの内臓共は天の姿に
dSr. sn n jrw t;	彼らの血は地の姿に
c jwcw. sn n Sw; t	彼らの子孫は困窮に
d pr. w. sn n zn. wt	彼らの家々は混乱に
crr. wt. sn n Hp wr	彼らの宮廷は増水したナイルに

b bsk の限定符は、W では小刀<T30>。その場合は「開腹する」の意。T では心臓<F34>。この場合は「内臓」の意。b 後半との並行語法から推して、血の類義語または縁語が予測されるところであるが、ここは FD(p. 85) の記載に従った。

d zn.wt の限定符は耕地と思われるが、池の略記の場合もありうる。前行 c の困窮の類語を求めるべきか、後続行のナイル川の縁語を求めるべきか。いずれの可能性も考えられる。ここは、FE 訳による conflagration や、FD の transgress(sni の項)を参考にした。ともかくも、エジプト文字は音声言語からは得られない幾ばくかの情報を伝え得るという利点を持つ。ローマ字表記に比し冗長な文字体系とされる一方、情報伝達の観点からは利点を含む文字体系でもある。もっとも、エジプト文字がその利点を最大限に活かし切ったかどうかの評価は、即座に下せない。時代が下るに連れて冗長度が利便性を超えてしまい、欠陥に陥った面があったことは否定できないからである。

(Pyr293)

a nDm_jb n (.)  pn	これなる王には快い
nDm_jb n (.)  pn	これなる王には快い
b (.)  pn pw wc	これなる王は 唯一者
k; n p.t	天の雄牛
c jw dr=n.f jr.w nn jr.f	彼は彼に対しこれをなす者を呪った
jw Htm=n (.)  pn tpw.sn_t;	これなる王は彼らの生残りを滅ぼした

(Pyr294)

a xr.w xndw.f	彼の玉座に属する者は
Sdj.f	彼は取り
Tz.f nn	彼はそれを持上げる
rDj=n n.f jt.f Sw r_gs stX	彼の父シュウがセトの傍で彼に与えた(それを)

## 第255章

(Pyr295)

a jdj.j ;x.t n Hrw_nxnj	地平はネケンのホルスのために香る
x.t n nb.w	主君達に食事を
b jdj.j ;x.t n Hrw_nxnj	地平はネケンのホルスのために香る
c nsr n hh.s r.Tn	その火炎の穂先は 汝らに向かう
H;w k;r	社の裏の者よ
d xfx.f.t hh.s r.Tn	その火炎の炎上は 汝らに向かう
wTz.w wr.t	偉大な者を持上げる者よ

(Pyr296)

a jdj.j ;x.t n Hrw_nxnj	地平はネケンのホルスのため香る
xt n nb.w	主君達に食事を
b j xbd pw	おお この憎まれ者よ
xbd qd	姿の憎まれ者よ
xbd jr.w	行いの憎まれ者よ

上の Pyr291-292、Pyr293-294、Pyr295-296の各ペアの構成要素の対称性は、一目瞭然であろう。それは、同一語彙や語句の反覆だけでなく、動詞活用を初めとする同一文法要素の反覆、同一の統語パターンの反覆等、様々な文構成要素に跨って観察されるものである。

そのような構成要素間の対称性あるいは並行性は、次の Pyr297-300に懸けても観察される。例えば、sDm=k;f 語幹を用いた帰結節の反覆、定型句 w;H scH r t; 「地に王錫を置け」の断続的繰り返し等である。まるで、このような同一の言語手段あるいは言語の手掛りを鏤めることによって、無秩序にそして際限無く膨らむ神話世界のイメージ描写に対して、節としての統合性を保つ効果を発揮あるいは醸し出し、結果的に精神に節度を保たせ、その破綻を免れさせたと思われるほどである。

(Pyr297)

a jdr Tw Hr s.t.k	汝の席から身を移せ
w;H scH.k r t; n (.)  pn	これなる王のため地面に汝の錫を置け
b jr tm.k dr Tw Hr s.t.k	もし 汝が汝の席から身を移し
w;H.k scH. k r t; n (.)  pn	これなる王のため地面に汝の錫を置かぬなら、
c jw=k; (.)	王は(やって)来るであろう
Hr.f m wr	彼の顔は 偉大な方(の顔)
pw nb ;t	これは一撃の持ち主
d wsr m nkn thm jm.f	彼への[＝に加えられた]傷の怪我にも耐える者

a,b scH「王位を示す錫」は、Pyr300bにも現れ、そこでも動詞 w;H+前置詞句(j)r t; 「地面に置く」を伴っている。FEは、名詞としての scHを、PT本文への出現順に示すと、(1) dignity, dignities、(2) insignia of dignity、(3) the august ones, the nobles、(4) power、(5) rankと文脈に応じて様々に訳している。全て意味的連想関係が強いと言えるため、厳密な訳し分けができるとも、また必要とも思われないが、(2)は即物性が高く、(3)は人物に言及する文脈と判断したためであろう。しかし、それは微妙な解釈に委ねられることになる。本節を、やや抽象的に「威信を棄てよ、地位を放棄せよ」と訳すこともできよう。参考までに、動詞 scHについては ennobleと訳している<sup>43</sup>。

c nb ;tを、FEは“The Lord of power”と訳し、ホルスを指すとする。上述の Pyr253bもそれを支持する。W本文のように限定符 F03(カバの頭部)を伴う;tは、FEによると、(1) striking-power(of god)と(2) moment, instantとの2語があり<sup>44</sup>、両者ともに「日」偏とも言うべき限定符の N05(太陽)を伴う異表記がある(p.1)。FDは、ここを(1)として訳しているが、Tの並行本文では、限定符に I12即ち鎌首を擡げ攻撃の姿勢を取った蛇を用いている。これはFDに見られない表記であり、PT独自の表記と結論づけるのは早計にしても、PTに特徴的な表記と思われる。PTに出現する7例全てが I12の変異を伴うからである<sup>45</sup>。このことから、FEに言及はないものの、獲物に飛びかからんとするコブラ(および、それを戴くカバ)の文字に、獲物を

襲う鷹をイメージする Pyr253b をも考慮して、「一撃の持ち主＝一瞬にして襲う強力な者」を読み取ることも的外れなことではないように思われる。このような考慮に基づき、上の拙訳とした。

二つの名詞 N が連続するいわゆる直接属格の型を持ち、「～の主、～の支配者、～の所有者」を意味する nb+N という語結合は、PT には多くの用例がある。後続名詞の意味によって仮に以下のように分類してみても、その組み合わせは驚くほど多様である(数字は例証箇所である)<sup>46</sup>：

#### A. 抽象概念

nb ;,t	力の～	0297c
nb cnx w;s	生命と支配の～	0950b
nb m;c.t	正義の～	1520a
nb Htpw	平安の～	0286a
nb x.t nb	森羅万象の～	0037b
nb xr.wt s.t	場の事の～	0152a, 0154a, 0156a, 0158a
nb z;bw.t	智慧の～	0394c
nb sd;	戦きの～	2251d
nb Sc.t	恐怖の～	2110c
nb tm	全ての～	0305a

#### B. 人と神

nb jmj.w s.t_c	助け手達の～	0398b
nb jnj.w	運搬人達の～	0400b
nb wr.t	偉大なる方の～	1017c
nb mt.wt	胤共の～	0510c
nb nTr.w	神々の～	1911a
nb pc.t	貴族の～	0737f, 1804bA
nb pc.t nTr.w	人々と神々との～	0895d
nb pD.wt	弓共(＝異民族)の～	0805c
nb n mtrw Hr m;c	義人の証人の～	2288c

#### C. 具体物

nb jStt 5	五食の～	0717b
nb jwew n gb	ゲブの遺産の～	2236b
nb jrp m w;x	溢れるワインの～	1524a
nb jrp.j	ワインの～	0820a
nb cpr	祭器の～	0930c, 0937f, 0938b, 0938d
nb w;D	緑石の～	0457c
nb wrt.t	ウエルレト冠の～	1719b
nb pr	館の～	1881b
nb m;q.t	梯子の～	0974a, 0980c
nb Hw.t	宮殿の～	0444b
nb Htp.t	供物の～	0399c
nb Df;.w	糧の～	0695b



## D. 地理的空間的概念(カタカナ表記は地名である)

nb ;x.t	地平の～	0277a, 0409a, 1172c, 2288a
nb j;b.t	東の～	1486c
nb p.t	天の～	0888c, 0964a, 0966a, 0967a, 0968a
nb S.w dw;t	冥界の湖共の～	1530c
nb Ss;t	夜天の～	0516b
nb Ss;wt	夜天共の～	0515d
nb sx.wt w;D.t	緑野共の～	0700a
nb t; r Dr.f	全地の～	1621a, 1872b
nb b; jrw	バクの～	0456a
nb mns.t Hr.t	上メンセトの～	1661a
nb xmnw	クムンの～	2270a
nb z;w.t	アシュートの～	0630b, 1634b
nb sbw.t	セブウェトの～	0804c, 1015b
nb Smcw	上エジプトの～	0513b
nb t; Smcw	上エジプトの地の～	0204a

## E. 自然現象

nb j;xw	陽光の～	1059c
nb rnp.t	年の～	0449a, 1520b
nb qrj	嵐の～	0261a

## (Pyr298)

a rDj=k; (.)  pn nsr n jr.t.f	これなる王は彼の目に炎を置くであろう
pHr.s H;Tn	それは汝らを跨ぎ
b dj.s nSnj m_m jr.w jr.wt	それは事をなす者共の間に嵐を起こす
c xfx.f.t.s m p;wtj.w pw	その発火は原始の者共の中に

## (Pyr299)

a zxj=k;.f c.w Sw Xr nw.t	彼は、ヌートを支えるシュウの腕共を撃つであろう
b wdj=k; (.)  pn rmn.f	これなる王は彼に肩を借りさせるであろう
m znb.t tw rmn.t. k r.s	汝がそれに肩を借りるこの城壁に

## (Pyr300)

a cHc rf wr m_Xnw k;r.f	偉大なる方はしっかりと彼の社の中に立つ。
b w;H.f scH.f jr t; n (.)  pn	彼がこの王のために大地に彼の錫を置き、
c jT=n (.)  pn Hw	これなる王は権威を得た。
sxm (.)  pn m sj;	これなる王は知恵をもって支配する。

[以下、次稿に続く]

## [注]

- 1 Miriam Lichtheim, *Ancient Egyptian Literature*, 3 vols, Berkley, 1973-1980.

2 FE 他、文献略号は拙論(1)以来使用してきた略号に従う。本文注解の中で FE, SUK 他の翻訳および注解の関連箇所と言及する場合、当該節(および行)における注解であれば、特に言及しない。しかし、当該節および行以外の箇所を参照すべき場合には、明記する。また、A, E, G 等の文法書と言及する場合は、基本的に関連箇所の章節番号を引用するが、参照の便を考慮してページ数等を示すこともある。

3 A:796A, 777A, 833A。

4 A:799D, 関係節形 sDm.f, 単数。

5 A:796G, sDm=t.f 形。

6 FD は、字義どおりの意味である“stand and sit”に並んで“pass one's life”を載せる(p. 170)。日本語の「立ち居振舞い」という表現が連想される。

7 A:798。

8 A:796A。

9 A:774。

10 A:796A。

11 A:779。

12 A:798。

13 A:772。

14 A:796A。

15 語末の-j は表記されないことが多い。

16 ガーディナーの「字書」のエジプト文字 A03は腰を浮かせて片膝を着き、もう一方の膝を立てて両腕を持ち上げた姿であるが、PT では呪術的理由から、上半身のみの A031(WTP のピラミッドになく80例全てがMN のピラミッド)または下半身のみの A032(33例全てがP のピラミッド)が限定符として使われている。と言っても、ここの「座す」は文字どおりの「跪く」よりも「腰掛ける」の方が、また王の取る姿勢としても、相応しいと思われる。墓碑銘と共に残された図像に一般に見られる姿勢のとおりである。実際、WN の両ピラミッドにおいて表語文字として用いられた可能性が高い Q01は、椅子の図柄である。ところで、T のピラミッドでは表音文字による用例しか見られない。したがって Hmsj は、rmT などと共に、ほぼピラミッド毎に特徴的な表記を持つ語の一つと言うことになる。

17 例えば Pyr1232には、xntj ;x.w が3回(a, c, d)、xntj cnx.w が1回(b)現れるが、その綴りは次に示すように一定していない：

ピラミッド別 (年代順)			本文出現箇所別		
xnt	P1232a	[xnt]nt	xnt	P1232a	[xnt]nt
xnt	P1232b	[xnt]nt	xnt	M1232a	[xnt]t
xnt	P1232c	[xnt]t	xntj	N1232a	[xnt]n[tj]j
xntj	P1232d	[xnt]ntj	xnt	P1232b	[xnt]nt
xnt	M1232a	[xnt]t	xnt	M1232b	[xnt]t
xnt	M1232b	[xnt]t	xntj	N1232b	[xnt]n[tj]j
xnt	M1232c	[xnt]t	xnt	P1232c	[xnt]t
xntj	M1232d	[xnt]tj	xnt	M1232c	[xnt]t
xntj	N1232a	[xnt]n[tj]j	xntj	N1232c	[xnt]n[tj]j
xntj	N1232b	[xnt]n[tj]j	xntj	P1232d	[xnt]ntj
xntj	N1232c	[xnt]n[tj]j	xntj	M1232d	[xnt]tj

xntj N1232d [xnt][tj]j xntj N1232d [xnt][tj]j

18 擬人的表現として、Pyr52aの軟膏への呼び掛け、Pyr200aの薫香への呼び掛け、Pyr150aの夜の聖船への呼び掛けを参照。

19 A(796)には定動詞 sDm.f が多数言及されるが、A(799)の分詞形には能動形単数が1例(Pyr1288a)言及されるのみである。FEは、その訳によれば後者を定動詞と解釈していると思われる。

20 m xnt xnr.t.f「彼の要塞の中で」(518c)。m xntj smH.k「汝の船の前に」(1209a)。前者をFEは「汝の要塞の中に居る者よ」と訳しているが、これに関しては、E(795)で537aに言及した際に、一解釈として jmj \_xnt、即ち m\_xnt のニスバ派生形としていることを参照されたい。

21 例えばボルグー(Borghouts, J. F., *Ancient Egyptian Magical Texts*, Leiden, 1978, p.Ⅷ)によると、新王国時代以降の魔術文書の中には外国語(=エジプト語以外の言語)によるものがあり、特にヌビアやリビアの魔術は高く評価されていたと言う。

22 ボルグー、上掲書93ページ以下の呪文143は、次のような蛇除けの呪文で始まり：「おお、汝穴の中にいる者よ、穴の入口にいる者よ、道の上にいる者よ、道の入口にいる者よ」、最後に「4回(繰返せ)」との指示がある。古代エジプト人と動物との関わりについては、Houlihan, P.F., *The Animal World of the Pharaohs*, London, 1996が詳しい。そこには、街中にさえ野犬が群れ、飼い犬の御蔭で難を逃れている様や、墓場をうろつく野犬が死者の神たるアヌビスの姿として定着して行ったこと、ネズミ対策のための飼い猫の存在を証する史料が中王国時代第11王朝(前21-20世紀)になって初めて現れること等、興味深い記事がある。もっとも、ペットとしての猫の存在となると、前4千年紀末の墓に最古の証拠があると言う(Ian Shaw and Paul Nicholson, *British Museum Dictionary of Ancient Egypt*, London, 1995 [1997], cat の項)。

23 リチュタイム、注1上掲書、p. 30。ただし、特に証拠を挙げているわけではない。rjについては、SUK, 1, 230、E, 838を参照。

24 James Henry Breasted, *Development of Religion and Thought in Ancient Egypt*, Gloucester, Mass., 1912, 再版1970, p. 93-94。

25 Maurizio Damiano-Appia, *Dizionario enciclopedico dell'antico Egitto e delle civiltà nubiane*, Milano, 1996, Cartiglioの項を参照。

26 E, 1004bの読みに従う。

27 拙論(2)、94ページ以下。

28 下記、注32を参照。

29 0450b, 0528b, 0983a, 0987b, 1085c, 1136a, 1409a, 1413a, 2062b。因みに、Hrw\_xjtの方は、41例を数える。

30 Richard Parkinson and Stephen Quirke, *Papyrus*, London, 1995, p. 18、図7。

31 E773-812。

32 W T

wcb <W60> (6) <W60wcb> (6) ( )内の数字は出現回数

j:rw <j:[rw]> (4) <j:r[rw]M02M02M02> (3)

<j:[rw]M02M02M02> (1)

(W60はGの目録に見当たらないコードであるが、A06, D60の水が流れ出る壺を描いた文字である)

ただし、sx.tについては、ここでは両者同じ表記である：<sxtM20> (W,Tともに4x)。PT全体を眺めると、割合としては少ないが、表語文字<M20>=翻字[sx.t]による表記がT以外の本文に見られる(W-P-M-Nの順に用例数は4, 7, 7, 2となる)。Pyr424b(W,T)の唯一の表記<sxtA25>は、「一撃」という全く別の語である。この一例にも、同形異義語の識別に神経を使う、PTの表記に見られる一般的な傾向が伺われ

る。これに反し、文法形式の書き分けには注意を払わなかったのか、無頓着と言うべきか、試行の揚句に断念したのか、しばしば様々な可能性を前にして判断に迷う場合が多い。上の語彙の書き分けに比べると、対照的である。関連して、脚注20を参照。

33 三笠宮崇仁『古代エジプトの神々——その誕生と発展』日本放送出版協会1988年、60ページ。本書は複雑なエジプト神話の世界を古代オリエント史の流れの中で捉えた総覧の書である。巻末の「古代エジプト神々一覧表」には、神ごとに職能、縁故地他の情報が簡潔に整理されている。視覚資料として、他に Schafer, B.E., *Religion in Ancient Egypt*, New York, 1992, 図版13(p. 24)や村治笙子・仁田三夫『古代エジプト人の世界——壁画とヒエログリフを読む——』岩波書店、2004、42–43ページ等がある。

34 E553.

35 この転写は、FE の解釈に従って受身語幹の sDm.w としているが、E1101は否定辞の w または ; を読みこんでいる。

36 A204以下も参照。しかし、A206B に言及された Pyr179a, 886a には該当例が見出せない。

37 SUK, 1, S. 333以下。

38 他に、欠損部分の復元が2回ある。

39 ピラミッドによる特徴としては、P だけが限定符 `z011を使うという点を指摘できるに過ぎない。W の tfn[nw]t と T の tftn とは、各1例だけなので、特徴とすべきか誤記とすべきか迷うところである。

40 同様の例は、U33[tj/t] (E, 41)、G38[z/z] (E, 43)、L6[x/x] (E, 45) にもある。

41 Carsten Peust, *Egyptian Phonology*, Gottingen, 1999, 5. 4. 1. Werner Vycichl, “Gab es eine Pluralendung-w im Aegyptischen? Eine relative Chronologie der agyptischen Sprache”, in *ZDMG* 105, (1955), SS. 261–270によると、男性名詞複数形語尾の -w さえも、母音ではなく、子音の表記である。

42 FE は、巻末索引において2箇所とも神格としている(p. 325a)。

43 (1) dignity (Pyr0218a, 0218b, 0219a, 0220a, 0224a, 0411c, 0622c, 0743c, 0800b, 1015a, 1138b, 1720d, 1745a, 1833b, 2020b) ; (2) insignia of rank (Pyr0297a, 0297b, 0300b) ; (3) the august ones, the noble (Pyr0407d, 0754a) ; (4) power; cf. WB, 4. 50. 3 (Pyr1674b) ; (5) rank (Pyr2086a) ; (6) ennobled (Pyr0515b, 0795e, 1013b)。

44 ガーディナー「字書」(p. 461)には、(1) として F03を semi-ideo(gram). とする<;tF03>の表記例と、(2) として F03を表音文字とする<F03tN05>の表記例とを掲げている。

45 W0253b, T0297c, W0334a, N0940b, N0973a, P1032c, P1487b。

46 この他、nb wc「唯一の～」(Pyr0276c)、FE が訳出していない nb Hk;(w)「魔術の～」(Pyr2136e)等がある。類似表現として、sr pw sr nb「彼は全ての長官の長官である」(Pyr1127b)があるが、この場合の nb は形容詞である。